

# 1 CFP 運用ガイドブックについて (このドキュメントの位置づけ)

## 1.1 背景/目的

前述のように、企業を取り巻く多様なステークホルダー (図 2.3-1 参照) が、様々な目的から CFP を企業に要請し始めており、CFP は企業の競争を左右するものになりつつある。これまで一般的であった CFP に求められる基礎的な要件に加えて、CFP を活用した規制や顧客のグリーン調達 (CFP 開示や CO<sub>2</sub>削減要請) に対応が必要になるケースが増加している。図 2.1-1 に要求に応じた CFP の客観性と正確性の相関図を示す。

特に、欧州法規対応ではサプライチェーン上の企業がデータを算出する必要があり、そのデータの客観性と正確性を第三者認証により担保する必要がある。これらに対応するため国内外で様々な企業や組織が参加し、機密性を守りつつも信頼性が高いデータの取得・交換するための方法の標準化が求められている。

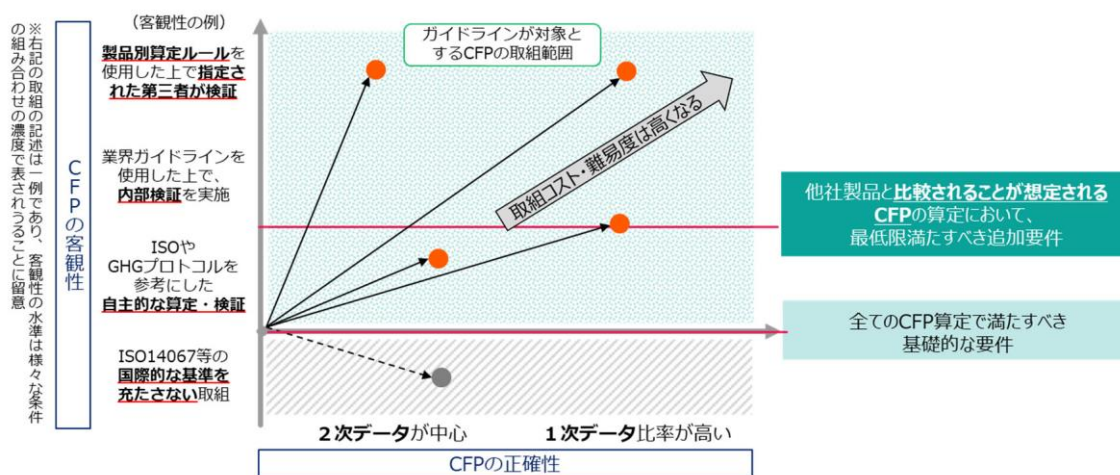


図 2.1-1 CFP の算定に関する要件の考え方

[出典：経済産業省カーボンフットプリント ガイドライン]

サプライチェーン上の川上から川下に至る全ての企業からデータを提出するにあたり、各社が個別のシステムを構築し独自の運用方法で取引先企業へデータ提出依頼を行えば、複数企業から依頼を受ける川上企業は対応工数、コストともに大きな負担を強いられる恐れがある。

昨今の欧州を初めとする各国でデータの標準化が求められている状況を鑑み、企業間でグローバルに活用可能な共通の規格でのデータ授受を行う必要がある。その手段として業界共通の基盤が必要であり、官民連携で検討を行ってきたウラノス・エコシステム (Ouranos Ecosystem) を活用する。本ガイドブックではウラノス・エコシステムを利用した上での CFP 計算等を行う業務のイメージを示す。

また、今後海外サプライヤ企業とのデータ連携が求められることが想定される。本データ連携システムでは海外のデータ連携システムとの相互接続を想定しており、個社毎

に海外機関と協議を行い、ゼロから連携に関する個社システム的设计を行うよりも準備が効率的に進むことが期待される。